

## 前 口 上

新しい世紀（すなわち、21 世紀）は「対話の時代」である、と言われて、すでに久しい時間が経ち、もはや 21 世紀も五分の一に近い時期にまで達しています。もちろん、このような標語（スローガン）が多くの人の口に上り、口から口へと受け渡されました背景には、逆に 20 世紀が余りにも「対話」の乏しい、これを欠いた時代であったからに他なりません。そのことを、これまで私たちは自分自身の、ごく身近な人間関係を通じて、あるいは、さまざまな形で世界を巻き込み、頻発した暴力を介して、これを経験し、今に及びますが、例えば大学における学問や、その研究や教育に関しましても、このような閉塞状態は「二つの文化」(C. P. Snow : The Two Cultures, 1964) の対立や背反として、はっきり姿を現わしています。そして、これらを打開するために、とりわけ 1970 年代以降、数多くの「対話」の場が設えられ、そこから数限りない、もろもろの「対話」が産み出されたことも確かです。

けれども、そのような取り組みを通じて、はたして私たちの「対話」嫌いの性格は、反対の「対話」好きの性格へと、言ってみれば、性格改善をされるに至ったのでしょうか。それならば、おそらく 20 世紀の末年から 21 世紀の初年に掛けて、あたかも世紀末のごとき出来事が積み重なり、私たちの国でも次々と、皮肉にも「対話」という語を表題に冠した著作が刊行され、これらの書物が私たちの時代（コンテンポラリー）を考える、ある種、必読書（マスト・ブック）にまでなる状況は、生まれなかったのではありますまいか。それは例えば、河合隼雄の『対話する人間』（1992 年）であったり、中島義道の『〈対話〉のない社会』（1997 年）であったり、はたまた平田オリザの『対話のレッスン』（2001 年）であったり、する訳ですが、その折の河合隼雄のタイトルを借り、また、そこに本誌なりの細やかな、トリビュートの思いも込め、本号は「対話する人間」と銘を打った次第です。

このようにして振り返りますと、どうやら私たちの「対話」嫌いの性格は、この性格という語の起源の一つの、英語のパーソナリティー（personality）が示しております通りに、そもそも私たちの先天的な、変更不能の人格（person）であるのか、それとも、それは私たちが後天的に、ある時は家族や地域の中で、ある時は学校や職場の中で、その都度の人間関係と、その教育を介して身に付けた、実は仮面（persona）に過ぎないのか、それが改めて、問い直されざるをえません。そして、それが仮に、その都度の私たちに割り振られた役柄であり、宛がわれた刻印（キャラクター）であるのなら、きっと私たちは 21 世紀が、どれほど「対話」の乏しい、これを欠いた世界に映ろうとも、その状況を確実に、少しずつでも「対話の時代」へと変え、そこに人類の未来や人間の幸福を垣間見る、かすかな願いを根絶やしにするべきではない、と希望を持って、訴えることが出来るに違いありません。